

一二二 所在地 大字上差尾(百枝)

部落内(岩下線入口)四叉路の地点に、板碑が建立されてある。台石二段(下巾〇・七五、高〇・四三米、上巾〇・七、高〇・二三米)で自

然石(巾〇・四五、

高一・四、厚〇・

一五米)で、猿田

彦大神、明治二十

一年(一八八八)

子十一月吉日、氏

子中と銘あり。



一二三 所在地 大字大見口(岩下)

佐渡良隆氏裏手に旧道あり。その岐路に大きな岩石があり、その上に碑が建立されてある。基礎自然石(巾四・〇、高二・〇米)碑石(下巾〇・五、上巾〇・七、高一・一五、厚〇・一五米)面に、宅地寄進、佐渡今助治郎、猿田彦大神、丑正月吉日、岩下村氏中、世話人、同芳之十と銘あり。

一二四 所在地 大字二津留

平木孝一氏宅前に板碑が建立されてある。

台石(巾〇・六、厚〇・一米)の上に、自然石(巾〇・四四、高〇・九五、厚〇・二二米)で、猿田彦大神、明治二十二年(一八八九)丑二月吉日氏子中、世話方、工藤政八と銘あり。

一二五 所在地 大字東竹原

菅原神社境内横に、台石(巾〇・五五、厚〇・〇六米コンクリート)の上に、巾〇・五七、厚〇・二、高〇・七一米の自然石に猿田彦大神と刻れ祀れてある。明治十八年甲斐有雄と銘がある。

一二五―二 所在地 大字大野

国道二一八号(大野小下)より左町道に入り約一〇〇米の所に猿田彦大神の板碑あり。文政七年(一八二四)五月吉日の銘がある。(高〇・九、巾〇・三三、厚〇・二米)の自然石。碑の上部の日型は、二つ共丸で朱で月型、日型を型とってあつたようで朱のあとが少し残っている。

## 第2編 石 佛

### 一、石 佛

石佛の形は、種々あるが、大別すると

一、如来 仏の中で最高の境地に達した存在で、悟をひらいた成道のすがた。

釈迦・阿弥陀・薬師・大日等

二、菩薩 如来の境地に達する前の段階

観世音（聖・十一面・千手・不空・綱索・馬頭・

如意輪）文珠・弥勒・普賢・虚空蔵・地藏 等

三、明 王

密教で呪文の絶大な功力を現して忿怒する姿  
不動・五大・金剛夜叉・愛染等

四、天

護法神などで仏教以外の神が仏教に帰依し吸収され、仏教守護の形をとる（俗人の形・武神の形）

持国天・増長天・多聞天・吉祥天・帝釈天・梵

天・弁財天・大黒天等

五、権 現

垂迹思想から仏と考えた  
権現・荒神・道祖神等

六、祖師像 弘法大師・伝教大師・空也上人・聖徳大師像等

町内各部落の堂さんの中には色々な仏像が合祀されておりますが、木造仏像が多く、これ等については、各堂等の調査の時に、後の集で詳しく登載する予定である。

こうした石仏は堂内に合祀されて、立派にされているものもあるが、道の辺に、ひっそりと一人淋しく立ち、又苔生した石仏を見ると、一抹の悲哀を感じ、幾度か頭をなで、私達の先人が残してくれた遺産を大切にしたいものと感じた。

### 1 石 室

一二六 所在地 大字滝上（下番）

馬見原夫婦岩の南側の自然岩の上に、石室の祠あり、秋葉山大権現が祭祀されており、大権現が馬に乗った姿である。

この由来としては、氏子一同の、家内安全と、五穀豊穰、商売繁昌を念じて祭祀され、それが受継がれている。この三河橋は、昔はこの下流に木橋として架設してあったが、その時代より、ここに祭祀されてきたものである。旧家西小倉屋の古文書に、そのことが記録してあったが、火災のために古文書は、焼失された。祭礼は、十一月二十三日、夫婦岩の祭礼と、同時に行われている。

又由来の別例として、昔山伏行者の修業の座としてあり、川



のせゝらぎの音に合せ行を成されしと云う其の座跡に祠を立て、山伏が火災を鎮め、家内安全と、五穀豊穰を祈り、合わせ祀られしと云われている。

其礎自然岩石の上に、台石(巾〇・七二 厚〇・二二米)室高(〇・六七 巾〇・六六米)笠(高〇・三三 巾〇・六六米)

一二七 所在地 大字馬見原(古町)

馬見原の市街地道路の正面つきあたり(二六五号線沿い)に、恵比須宮が祭祀されてある。昭和四十一年に鎮座百年祭が行われているので、明治の初期に、祭祀されたものと思われる。(巾〇・九 奥〇・七 笠巾一・二六 高一・六四米)

恵比須宮

此処の恵比須宮は、大阪西の宮、恵比須宮より、お受けしたもので、商売の神様として、祭祀され、毎年十月二十日の祭日には、町内の商家は、笹の枝に、鯛をさして恵比須宮の神前に供え、夕べに持ちかえり、それを肴に、商売繁盛を祝うならわ

しがありました。今日では、其の風習も少なくなり、一部の商家に見られる程度となっている。昔はこの祭の夜は、相撲等が行われて大変賑っていた。

一二八 所在地 大字花上(下神働)

下神働部落入口右側に小塚ありて石室が建てられてる。(巾〇・四六 高〇・三七米 笠巾〇・五六 高〇・二八米)中に石仏一体祀られてある。(巾〇・一八 高〇・三米)以前ここには、数百年を経た、老松大木あったが、落雷にて枯倒れたが、この塚を部落民は、やんぼしさんと呼んでいる。古老有働取太郎氏(故人)の話によれば、話しは昔に遡り、とても力の強い方で、円大法院と云う。お坊さんがいられて、その方を埋つてあるとのことである。

昔この部落に

は、毎年大火ありて住民苦しめりと云う。彼のお坊さんがあわれみ、水の法祈禱をされ、それ

より此の部落に火災がなくなつたと云う。又、とても新にて不



精あればたちどころに、たゞりありと云われており、部落民毎年旧十一月一日を、祭礼の日としてお詣りしている。側に宝篋印塔・頭部があり昔の供養塔の一部かと思われる。

一二九 所在地 大字二瀬本（小園）

通称、大師堂に、石室二棟あり、各三体の石像が安置されてある。



二瀬本（宮の下・町）大野原、丸小野、三部落民が、弘化五年（一八四八）三月二十四日八十八ヶ所参りの霊地として奉齊されたもので、六十六番千手観音・六十七番薬師如来、六十八番弥陀仏、六十九番観

世音、七十三番釈迦如来、七十四番薬師如来、が奉祀されてある。

此の建立には、山口白寿が主体となって、三地区の信者、崇敬者と共に、建立されたもので、仏像の右側に、奉寄の碑があり、正衛外数十名の信者名を彫刻してある。

石室左側は、（巾一・五五 高さ一・四五奥行〇・六五米）

右側は（巾一・〇米の石室） 台石（高さ〇・三 巾〇・二

三米）の石仏が三体ずつ合祀されてある。

一三〇 所在地 大字二瀬本（大野原）

明治十七年、大野原部落に大火発生し、人家はもとより、牛馬までも大量に焼死したと云われる。部落内では、田上亀太郎氏宅は、飼育頭数も多く、牛馬も相当数焼死したので、此の霊を弔うため個人で観音堂をつくり霊を弔って、今日に及んでいる。堂は、現在地に鎮座されたが、土地所有者の移転と、道路の改良工事等により、田上静夫氏宅地に移転されて、現在も、毎年牛馬の霊を弔ってきている。

（田上静夫氏談）

台石（巾〇・八五 厚〇・一三米）堂高（一・一五 巾〇・七八米）中に二体の仏像（縦〇・四四 横〇・一八米）が合祀されてある。明治十七年十一月一日の建立

一三一 所在地 大字橋（吐の瀬）

五ヶ瀬川本流と川走川の合流地点より逆上ること約五〇〇米のところの川端に、注連波水神が、祀られてある。大きい自然石（巾三・五五米 高一・八米）の上に石室がある。（高〇・七四 巾〇・八米）幾百年かの洪水にも耐えて鎮座せられ流失することもなく水利の便はもとより農工業の発展を日夜見護られ



て、宮崎県はもとより遠く鹿児島県辺りからも参拝者多く、毎年十月十三日、十四日が例祭で、枕山部落で神幸式が行われ、夜は角力等で賑い、最近では近隣町村では、珍しく又優れた祭典の一つに数えられている。明治二十三年四月吉日の建立となっている。

この石室の前方に、水神塔



(石塔)が建っている。○・一七米の五角形のもので(高○・八米 巾○・三米)注連(サザナミ)水神の信

者が百度参りを行う時に此の塔を廻って百度の大願を成就させている。

昭和四十一年吉日建設

一三二 所在地 大字橋(吐の瀬)

県道河内・矢部線左側上部の大巖屋に、三十余段の石段を登ると、石室と石仏が列んで、安置されている。石室(台石巾○・五五 高○・一七米)室(高○・六七 巾○・五米)中に淡島辨天様が祀られ、その横に観音さんが列んで合祀されてある。昔から幼児の神として尊崇があつく、特に乳不足の母親等の参拝が多く、御礼参りの奉納のものとして、乳児の形式、守袋等の品々が所せまく供えられている。文政十「亥(一八二七) 正月吉日 枕山村 施主工藤伝三郎と銘がある。

一三三 所在地 大字高辻

町道(高辻下山線)より右小道に入った所に、石室四基があり、その間に板碑が二基並び、合祀されてある。左側より石室(高一・○ 巾○・五九米)中の仏像なく、銘なし、次の石室は、台石二段、(高一・一米)中の仏像なし 笠部に下組中祠毘在天と銘ある。次の石室は、台石(巾○・八二 厚





○・一七米) 高一・一四米で、中に仏像一体ありて、奉納天保十一年(一八四〇)九月吉日 左面に小倉村駄原木実市治良 建之と銘



がある。次に自然石の板碑が二基ありて一番右に石室がある。中に仏像一体が祀られてある。詳しいことは

○・一五 石仏高○・五二巾○・二三米) 中央は、八十三番観世音菩薩(台石巾○・三二高○・一五 石仏高○・五一巾○・二二米) 左側は、馬頭観音菩薩(台石巾○・四一 高○・二〇 石仏高○・五九 巾○・四米)の三体があり、建立年月等、詳しきこと不明。

同境内の右側に、別に石室一基あり中に石仏四体が合祀されである。石室(巾一・八五 高一・六三米) 石仏右より(高○・五 巾○・三米) 台石に高野山と銘あり

不明である。

一三四 所在地 大字長谷(塚の原)

町道(倉木山線)左側に、塚の原事比羅宮があり、境内の左側に石室あり 中に石仏三体が祀つてある。室は、基礎(巾一・六四 高○・七米の石積)の上に(巾一・五 高一・〇米)にあり、中の石仏は、右は八十二番千手観音(台石巾○・三二 高

次の石仏は、台石(巾○・三高○・〇五米) 石仏(高○・五巾○・二二米) 八十番菩薩如来 中央は、台石(○・三二 高○・〇五米) 石仏(高○・五六巾○・二五米) 八十番千手観音

次は、台石(巾○・三二 高



○・〇五米) 石仏(高〇・五二 巾〇・二米) 八十番十一面菩薩・左側は、宝篋印塔の頭部のみ(高〇・三米)が置かれてある。基礎台に、奉寄進 昭和四十一年九月 佐藤シズエと銘あり

詳しくことは不明である。

一三五 所在地 大字上差尾

興梧護久氏宅入口左側に、石室が建立されており、妙見大明神と云われている。

現在、室内には、台石のみあり(虚空蔵菩薩と刻まれ)仏像は、なくなっている。下に湧水池あり、興梧氏の話しによれば、この湧水は、昔より枯れることなく、昔は飲料水として使用されていた。大正末期頃まで毎年十一月十八日には、甘酒まつりを行って祭礼が行われ、又子安の神としての崇拜が多かったと云われ、杉・エノ木の古木がある。

基礎(石積巾一・三六 高〇・八六米) 台石(巾一・〇四 厚〇・二米) 室(高〇・七三 巾〇・八二米) 笠(巾一・〇八 高〇・五五米)

一三六 所在地 大字長崎(下長崎)

部落三皇神社横に石室あり宮崎県諸塚より分身されたと云う

正一位稻荷大明神が祀つてある。  
自然石のくり抜きの石室で(台石巾〇・六五 高〇・二五 厚〇・五〇米の上に巾〇・五五 内巾〇・三五 高〇・八米)ある。

一三七 所在地 大字長崎(上長崎)

船の口養漁場入口より約五〇  
○米花畑の先方に、若宮さんと呼ばれているところに天明四年辰年(二七八四)八月建立の石塔がある。(台石巾〇・三 厚〇・一〇 室巾〇・二五 高〇・五五 笠巾〇・四 高〇・一八米)正面に若宮大明神と銘あり横に宝篋印塔の一部と思われる頭部があり(長〇・二三米 巾〇・二二米)相当古き時代に祀られているものと思われるが詳しくことは不明である。



一三八 所在地 大字馬見原(古町)

国道二六五号線右側(原商店横)石室(高一・三米 巾〇・

二九米) 台石二段

(巾〇・八三 高

〇・三二米) 中に

石仏一体(地藏菩

薩)が祀しある。

昔、古町のはずれ

川向の五ヶ瀬町萩



原へ通ずる小さい橋が、五ヶ瀬川にあつたが(昭和二十四年頃

まで)大水が出ると、水浸し、人畜の被害があつていたと云う。

その供養のために建てられたと云われる。

一三九 所在地 大字滝上(竿渡)

部落北側山手に大師堂の石室

あり(高〇・八六米 奥〇・四

石戸二枚各〇・三 台石三段上

〇・六 巾〇・八下〇・九米の

切石)中に高さ〇・五米の大師

像石仏が安置されている。

安政四年(一八五七)九月の建

立であるが、詳しくことは不明

である。



一四〇 所在地 大字方ヶ野

藤嶋幸治氏前旧道右側根の大木の根に石室あり(台石二段上

〇・四三 下〇・五三米 室高〇・四三 笠巾〇・五三)大日

如来像が安置しあり 牛に乗りて安座しあり 牛の神安産の神

として、毎年旧十一月二十八日祭祀しあり 大正七年旧十一月

二十八日建立で立主藤嶋寿八郎と銘あり

一四一 所在地 大字馬見原

明徳山の石段(二三一段)を

上ると老杉の横に稲荷大明神の

石室がある。基礎石積で(下巾

一・一五 上巾一・〇六米)室

(巾〇・四四 内巾〇・三 高

〇・六二米)屋根は亜鉛板葺 中

には石玉が祀つてある。老杉の

根元に石室があるが(台石

二段下台巾〇・九五 厚〇・一

八 上台巾〇・六 厚〇・二一

米)室(巾〇・四四 高〇・五四米)笠(巾〇・七 高〇・四

三米)中の御神体はなくなっている。

この台地、縦約七米、横六米ありて明治の初め馬見原の豪





商壇那集が商売繁昌を祈念して奉納されたものと云われ、石柱が周囲に

数本ある。建立年月等不明であるが、正面に石造センコ



立て(巾〇・二三 高〇・一七米)に明治十九年丙戌二月奉納新八代屋と銘がある。

又右側に石灯籠が一基ある。全長一・五五米で、正面に奉獻横面に昭和二年九月十五日 工藤寛三郎と銘がある。

一四二 所在地 大字馬見原

明徳山台地稻荷社の西側に石室が建立してある。金刀比羅宮とあり

基礎石積(下巾一・八 上巾一・一三 高一・三一米)台石二段で(下巾一・一五 厚〇・一九 上巾〇・七四 厚〇・一四米)中灯(巾〇・五九 高〇・五三米)笠(巾〇・八五 高〇・三米)横に灯籠一基あり 基礎(巾〇・六五 高〇・一五米)台石(巾〇・四五 高〇・二米)灯身(巾〇・二 高〇・五八米)笠(巾〇・五五 高〇・四五米)

正面に奉寄進、台石に太留屋と刻みあり 建立年月等不明である。

一四三 所在地 大字滝上(土戸)

圓福寺境内横に

石室あり 中に石

仏一体あり お大

師さんと呼ばれ、

昔は祭礼時の相撲

で賑わったと云う。

石室(高一・〇 巾

〇・四 笠巾〇・六一米)石仏(高〇・二四 巾〇・一三米)

建立年月等不明



一四四 所在地 大字滝上(土戸)

元教尊寺跡の裏杉山の中にある。天保十四年(一八四三)

癸卯九月十五日

立主 教尊寺 六代目 住 宝叡山と銘ある。

詳しくこと不明

石室(下台巾〇・七五 厚〇・一五 上台巾〇・五二 厚〇・一七米)

室巾(〇・三四 高〇・四五米)笠巾(〇・五四 高〇・二四米)

石仏(巾〇・一八 高〇・四)一体

一四五 所在地 大字方ヶ野

国道二一八号線道路北側南向に石窟がある。この中に、火伏

地像の石像(高〇・六七 巾〇・

三一 台石上巾〇・四三 厚

〇・五 下台中二・一〇米)が

安置されてある。

文政十三年(一八三〇)寅七

月の建立で、部落の災害防止の

為祭祀されたと云われる。又此

の地像尊は、「夜尿症」「よだれ

症」に御利益があると云われ、近在の人々の願意が多いと云わ

れている。



一四六 所在地 大字菅尾

老人福祉センター前広場に在り、以前は同センター裏に祀しあった。台石二段(下台中〇・七 厚〇・〇八 上台巾〇・六

六 厚〇・二米)

室(高〇・五五

巾〇・五六米)

笠(巾〇・六五

高〇・二五米)

火伏の神が祀ら

れ、毎年六月二

十四日祭礼が行われている。



一四七 所在地 大字菅尾

茶工場上のくぬぎ山上に在り(高〇・六 巾〇・四五米)石

室に石仏一体あり お大師さんとして祭祀されてある。大正八

年七月の再建で、毎年三月二十一日祭礼が行われている。

一四八 所在地 大字塩原(黒原)

犬淵、明音大神の後に観音さんと呼ばれ、(高一・三三 巾〇・

八五米)石室あり、石仏二体が祀つてある。左側は三面千手観

音で建立年月等詳しきこと不明

一四九 所在地 大字今

観音堂の横に(縦一・三〇 横〇・八五米)石室あり 仏像

一体(馬頭観音)が祀れてあり、弘化四年(一八四七)一月吉日、今村氏子中 世話方 栄吉 立花左衛門と銘がある。

その横に、縦一・四五米 横〇・九五米の石室があり、仏像二体(四十九番釈迦如来・五十番薬師如来)がある。建立年月等不明



立年月等不明

一五一 所在地 大字花上(中神働)

分校下、部落道横に(縦〇・九三 横〇・三八米)石室あり石仏一体が建立されてある。

建立年月等不明であるが、樫とタブの老木がある。

一五二 所在地 大字今

高仏、広場の右側に(縦〇・八〇 横〇・四七米)石室がある。

山ノ神を祀つてあり毎年三月十六日に祭祀されている。

一五〇 所在地 大字八木

永壽寺前三叉路

に(縦一・五五 横

〇・八一米)の石

室がある。中に石

仏二体あり 右四

十六番台石(巾

〇・四六 厚〇・

一三米)石仏(巾〇・二六 高〇・五一米)左四十七番台石(巾

〇・二四 厚〇・一三)石仏(巾〇・二一 高〇・五四米)建



一五三 所在地 大字菅尾

中村光男氏前方丘に(旧道上部)(縦〇・九〇 横〇・六三米)石室があり 稻荷大明神の祠がある。

建立年月等不明であるが、部落では、毎年三月二十一日に祭礼が行われている。

一五四 所在地 大字花上(花寺)

観音堂横に石室が建立されてある。室(巾〇・四四 高〇・五九米)笠(巾〇・五二 高〇・二四米)

明治二十七年建立とある。これは風除神が祀れ、豊作祈願のために毎年四月八日に風祭りが行われている。



一五五 所在地 大字塩原

堂後谷池左側に、石室一基あり（巾〇・六一 高一・一七米）のブロック積で中に、大師像（巾〇・一八 高〇・三九米）が祀られてある。ここはカーブにて事故多発地点のため、交通安全を祈り建立されてある。建立者 多津田勸・石工興梶政行と銘あり

一五六 所在地 大字柏

観音堂の左側に（台石横一・五 高〇・六五米の上に、高一・五 横〇・八五米）石室が建立されており、中に薬師地藏（四十番）地藏菩薩（四十一番）の二体（高〇・四八 巾〇・二二米）が合祀されてある。詳しいことは不明である。

一五七 所在地 大字柏（溜淵）

県道河内―矢部線沿い、田代重利氏の庭に（巾〇・六五 高一・二五米）の石室があり、中に仏像一体が祀られてある。詳しく



きことは不明である。花筒（石造）に宝暦八年（一七五八）三月中日、田上茂兵と銘がある。

一五八 所在地 大字橘

小学校下角三叉路上に石室あり 台石（巾一・一五 厚〇・一五米） 室高（一・一五 内巾〇・六米）の中に石仏（地藏尊）一体（高〇・四五 巾〇・二米）が祀れ、寛保四年二月吉日（一、七四四）に銘あるも詳しくきこと不明である。



一五九 所在地 大字橋 (栴山)

公民館の裏山に、巾〇・四三 横〇・四 高一・〇米の石室があり 卍印のみにて他に何にも明記されていないが此の地は、以前雑木荒地にて人の立入ることのできない所であったが、終戦後、江藤今朝人氏にお告げありて栴山地内に未だ見捨てられ日頃かえりみられない尊い所があるので探して手厚い祭祀を営む様にとの事で、区内を幾日も費して探すうち此の荒撫の地を見つけ、鳥居、祠を建て清浄にして祀つたのがこの石室の始りと云う。

一六〇 所在地 大字橋 (栴山)

公民館の裏山に豊受大神の鳥居あり。その正面に石室(高〇・八七 巾〇・二九米)が一基建立されてある。石室の中に(高〇・一七 巾〇・〇六米)小さい金塗りの仏像が一体祀れてある。

五穀豊穰を祈念して建立され祭祀されたものと云う。

一六一 所在地 大字橋 (栴山)

部落中央に、基礎石積の上に木造瓦葺の祠あり 中に石像一体あり(高〇・七五 巾〇・一九米)

火伏地蔵さんと呼ばれている。建立年月等不明

一六二 所在地 大字橋 (吐の瀬)

県道河内・矢部 線右側に石室がある(台石二段〇・二四 巾〇・九三 一・一三 巾〇・七八米)中に仏像



一 体が安置され、台石(〇・二八×〇・二八) 仏像(高〇・五 巾〇・二五米) 文政十<sup>丁</sup>亥(一八二七) 正月吉日

栴山村施主江藤伝三郎と銘ある。以前は、旧道山道の岩の下に祀られてあったが、道路改良工事に伴い現地に移転せられた。日頃交通安全・家内安全・子供の成育を願って参拝者多く、常に酒、果物等供えられて一般者の尊崇の厚さを物語っている。

一六三 所在地 大字橋 (栴山)

栴山と椎屋の境にあり、以前は小さい祠であったが、長年の風雪により破損甚だしくなり協議の上、昭和三十二年三月現在の石室に再建した。完成と同時に四国金刀比羅宮の祭神の分霊を奉齊したものである。

神官、後藤松寿、総代江藤一四、江藤清臣、後藤末広、山辺狩

又、山辺義継外氏子一同、石工山辺一男と銘がある。

より現在地に移された。

一六四 所在地 大字橋(椎屋)

部落中心地に天神宮の石室があり、基礎石積(高〇・八米)

台石二段(高〇・三米)の上に、高〇・六五 巾〇・五米の中に祀られてある。社新築昭和十年旧十一月二十五日 椎屋氏子、石工 佐藤宇一郎と銘あり

一六六 所在地 大字高畑

村中道路上の工藤等氏所有の畑の中に石室がある。

一六五 所在地 大字高畑

部落内の道路を

進むと通称鬼の岩

門と呼ばれる 手

前の左側に石室が

ある。台石(巾〇・

六五)の上に室高

(一・〇 巾〇・



台石(巾〇・三五 高〇・一七米)に、室(高〇・四七 巾〇・三四米)の中

に石仏一体がある(台石〇・一三×〇・〇八) 仏像(高〇・二五 巾〇・一〇米) 子安観音と云われる。今も安産を祈ってお参りされている。

一六七 所在地 大字東竹原(野原)

竹原線入口三叉路左側に石室がある。

台石(巾〇・七五 厚〇・一六米)室(高〇・八六 巾〇・四

五 笠巾〇・八米)の中に仏像一体(弘法大師像)(台石〇・一

九 仏高〇・三 巾〇・二六米)が祀られてある。天保十四年

(二八四三)七月二十一日 野原建之と銘あり

以前は、鬼の門の手前に建てられてあったが、道路改良工事に

斐安石衛門と銘がある。



一六八 所在地 大字東竹原 (竹原)  
 部落内三叉路右側に大師堂あり、左側に石室がある。台石(巾一・五五 厚〇・一二米)室(高〇・五七 巾一・〇米)笠は、自然石一枚物が置かれてある(巾二・一〇 厚〇・一七 長〇・八三米)中に仏像二体が合祀されており十七番と十八番で同型(台石〇・三四 厚〇・一五の上に仏高〇・五三 巾〇・



二七米)である。薬師如来像建立年月等不明

一六九 所在地 大字東竹原 (竹原)

大師堂後の杉山に立派な石室が建っているが、中の仏像がなくなっている。建立年月等不明なり(台石二段で全高一・四三室巾〇・四 笠巾〇・八米)

一七〇 所在地 大字柳 (猿丸)

公民館横より登坂に入り牧場へ行く道路左上に石室があり、基礎(下巾二・〇 高一・一五米)の上に高〇・九 巾〇・五米のもので稻荷大明神を祀ってある。

一七一 所在地 大字長谷 (稻生)

東光寺の裏山に、栗石の上に、巾〇・四八 高〇・五米の石室一基あり 中の御身体として玉石一個あり 部落の人の話では、天神さんとも云われているが、建立年月等詳しきこと不明なり

一七二 所在地 大字長谷 (稻生)

倉木山線、運動広場入口三叉路の所に石室一基あり(高〇・八 笠巾〇・六四 奥〇・四二米)中に石仏一体(高〇・四五

巾〇・二三米)あり文政十年(一八二七)二月吉日と銘あり 詳しきこと不明 運動場角に、すばらしい枝振りの松の古木がある。

一七三 所在地 大字長谷(塚の原)

金比羅宮の右側に、タブの太木があり、その根に、立派な石室(台石巾〇・七 厚〇・一五(室) 高〇・五五 巾〇・四 笠部巾〇・八七 高〇・四一 上巾〇・五九米)一基があり、正面に金比羅大権現・裏面に、弘化三年(一八四六)午十月吉日と銘あり 詳しくは不明である。

一七四 所在地 大字大見口(岩下)

観音堂の石段昇り上りより左側に入ったところに石室が建立されてある。台石(巾〇・七八 高〇・一五米)室(高〇・六八 巾〇・七二米)笠(巾〇・九二 高〇・七一米)中に石仏一体あり台石(巾〇・三二 厚〇・一八)仏像(高〇・五三 巾〇・二五米)で、台石に七十五番薬師如来とある。

一七五 所在地 大字上差尾

東山東福寺薬師堂右側に石室一基建立しあり 基礎(巾〇・八三 厚〇・二三米)室(高〇・六五 巾〇・六

米)笠(巾〇・七 上〇・一九 高〇・二米)中に石仏一体祀りあり 奉寄進□□□□、寛□九、七月と銘あるも判読出来ない 銀杏の太木あり

一七六 所在地 大字柏

小園稻荷神社に石室一基建立しあり立派なものであるが無名のために建立年月等不明である。

基礎(上巾一・七八 下

巾二・一〇 高〇・九米)

台石(巾〇・九三 厚〇・一六)室(巾〇・六九 高〇・八三米)笠(巾一・一八 高〇・七六米)



2 石 仏

一七七 所在地 大字柳井原(村の前)

佐藤幸人氏宅前方の丘に、お大師堂があるが、この丘一帯(面積約三反歩)周辺に、同氏の祖父 佐藤宝作翁が、明治四十二年に貯蓄構記念に建立された。四国八十八ヶ所の大師石像八十八体と、観音石像三十三体が、祭祀されてある。昭和二十年頃迄は、この地に芝居劇場が建っており、毎年三月二十一日、七



月二十一日の祭礼日には、部落総出に、近隣の人々、多勢の参拝客に、芝居観覧で出店も出され、老若男女の人出で、大変賑わっていたと云う。又この一帯には、つつじも数百本植樹されてあり、五月四・五日頃が見頃にて色とりどりと、美しく咲きほこり、百二十一体の仏像も笑を浮かべて参拝者を待ちわびているようです。

この大師堂の横から、丘の三段階に亘り、翁を偲び又慕いて、次の詩文がコンクリート造り板碑に刻まれ建立されてある。

慕イテ宝作翁ヲ 堂主 佐藤幸人

作詩 佐藤恵照

刻字 佐藤なを

一、そのかみの

山を拓きて弘法の 御堂を建てし宝作（翁）の

崇き尊き御姿に 今髣佛と蘇る

二、そのかみの ②

桜は朽ちてなけれども 芝生の緑日に増せば

赤きつつじは緋と萌えて 大師の堂に

照り映ゆる

三、堂建つる

宝作（翁）は称えけん 色は匂えど散りぬるを

浮世の花の一盛り 遍照金剛 南無大師

遍照金剛 南無大師

四、松風の（井泉の水）

大師の堂にほど近く 灯籠青く苔生して

宝作（翁）掘りし井泉湧く 永久に盡きせぬ

水清く

五、夢なりや

「宝円」「おせん」住みつきて 井泉の水を朝夕に汲みて読経の

明け暮れも 遠き昔となりける

六、井泉掘る

宝作（翁）は誦ナしにけん 大地の色は老いずして

人間の世は移ろうを 六根清浄 南無大師

六根清浄 南無大師

七、宝作（翁）の（奉祭石仏）

開山成りて幾春秋 三十三基の観音は

慈悲の御姿そのまゝに 無言の教え宣え給う

八、遙けくも

宝作（翁）逝いて幾星霜 八十八基の石仏は

無言の教え宣りつゝも 深きしじまに

座し給う

九、石仏に

宝作（翁）は念じけん かの永劫の深みより

地籟天籟法の声 南無釈迦如来

南無阿弥陀 くく

佐藤宝作翁の足跡の文

翁曾って公務にありて十余年、議長助役の任重く、東奔西走暇なし、日露の戦 猛き頃、時將に、文明開花の花開く 計造屋敷や美奈尻は、和牛改良先駆けし 翁の事業の遺跡なり、遙々と 乳牛求め西東、天蚕飼育試みし翁の覇業に胸躍る 世は黎黎の明治かな

劇場遺跡

今もなを 大師の堂にほど近く、遠き祖先の観劇の 観座、棧敷きそのまゝに 遺跡はしるく、残りたり。その昔 三味や太鼓や拍子木に 老若男女集い来て 三番叟から 前狂言 そのざわめきが伝い来る お芝居の悲劇 喜劇のおもしろさ 己が生身に引きくらべ 涙 喜び 綾なせる 遠き祖先の心かな。

よろこびは 勸進元の眉にあり はた観衆の声にあり 酒に肴を 交し合い 切狂言に夜は更ける。うれしさに 勸進元の宝作（翁）は 心楽しく 銘名す お大師堂の 又の名は 西向山の安楽寺。念願木仏 気高くも たゞ一徹に老いの身の 鑿

を振るいて 御仏の 姿彫みつ 念ずるは 国家安泰 無事長久。長からぬ 生身の終り 知る故に 家運長久 ひたすらに

念じて 彫れば み仏の 数も

いつしか十余体。仰ぎ見る 十

余の仏 巖そかに み堂の奥に

座し給う 眼つぶれば 迫り来

る 高き尊き 法の声。自像彫

刻 老の日を 名も芳ばしき

梅檀の 若木に託し 六十の

生身の名残り 留めんと 己が

姿を 彫みけん。今も尚 明治

の名残り そのまゝに 気骨を

眉に 漲らし 扇子を右手に 端座する 羽織 袴の翁像。は

かなさや 浮世の花は 脆うして 翁は遠く 逝きしかど 翁

の心 ゆかしくも 吾額づきて 恋い慕う。

（一九七二年八月の建立である）

一七八 所在地 大字今（滝下）

部落中間の町道左側上方約一〇〇米の岸壁の下にあり

此処は、古くより「滝下観音さん」として、近郷に知られて

おり、縁日の正月十八日には、宮崎県からも老若男女の参拝多



く、賑いをしめしていた。特に「縁結び」の、「観音さん」と云われて、若い男女の参拝が、多かつた。時代と共に、減少してきたが、近年又参拝者も多くなってきた。

以前は、現在地の上の岩穴に安置されていたが、岩崩れのため、現在地に移されている。

又、岸壁には、次の通り刻まれてある。

為在善男子善女人為現當二世法花 千 部奉讀誦建立御堂

□金龍山妙典寺 十一面尊像奉造立成就之御奉寄進 滝

下之内上者自作竹林溪下者境及□寺領里於子々孫 為給人永

代此内可住地□人不可召仕 法花讀誦者開山坂東相模国

藤澤住人龍音

禪師 願主 今村山城守 源末久

千時 永正六年(一、五〇九)

巳巳正月十八日

法名 昌 清

金 永

これは今村氏が 米山に築城したとされる。永録三年(一五六〇)より、五十一年前の事である。更に修理の記録が、大正十四年四月改修

今村山城守後胤

今村 虎熊



と銘がある。

下方の岸壁の下に、

右より(台石共〇・五 巾〇・二米 頭部なし)二番目(台石共〇・五 巾〇・一九米 頭部なし)三番目(台石共〇・七

同 亀三郎

同 定雄

同 国八

田上 亀太郎

藤屋 廣記

鹿児島県三辺郡笠砂村

石工 上村庄一

一 巾〇・二三米) 四番目(台石共〇・五七 下巾〇・四三 胸  
巾〇・三五米) 五番目(台石共〇・五三 巾〇・一五米 頭部  
なし) 六番目(台石共〇・六五 巾〇・二三米)  
以上六体の石仏が、合祀されており、参拝者の来訪を待ちわび  
ているようである。秋の紅葉時には、ここ蘇陽峡の眺めは、す  
ばらしい。

### 一七九 所在地 大字花上(下神働)

下神働部落公民館の前に建立しある大師堂の中に、三番と三  
十四番の石仏が合祀されてある。

由来として、次のとおり記しあり

本大師堂の本尊は、明治の中期に高畑地区を始めに当地区迄に  
新四国八十八ヶ所の大師を祭祀されるに当り、三番の大師を祭  
祀、神働先に、三十四番大師が祭祀された。其の後、本大師堂  
改築が成され、同時に、三十四番目大師様も合祀された。


### 仁王像

#### 一八〇 所在地 大字二瀬本(丸小野)

二瀬本の夜渡神楽で、有名な、火伏地藏秋葉神社の第二階段  
(二十八段)を登ったところ左右に等身大の石像二体がある。

昔から仁王さんと呼んで、庶民から親しまれ、ワラジ、下駄を

始め酒、花等の供物が絶えたことがない。

日本石仏事典によれば、金剛力士と、密迹<sup>シヤク</sup>力士を合せて、仁王  
と呼んでいるが、此の仁王さんには、杵(シヨ)

とよばれる、持物や獣皮の服を天衣とする着物もないところか  
ら仁王力士と呼称する方が適当な様に思える。此の右の石像は、  
弘化三年(一八四六)山口伯寿翁が世話人となって建設された  
が、この石像は、馬見原の吉野屋を始め多数信者の援助により、  
土地の信徒が建立したと、云われている。現在は、町の観光パ  
ンフレットの表紙にも用いられ、二瀬本の夜渡神楽と共に、普  
く宣伝せられ、県内はもとより、宮崎、鹿児島、福岡、広島と  
訪れる人も多い。

石像は、左右同形であるが、右の像は、口を開け、左の像は、  
口を結んでいる。尚右の像の手は上げている方は結び、下げて  
いる方は広げ、左の像は反対である。

右側の台石の正面に、奉寄進 弘化三年午十二月・左面に、  
山口伯寿、右面に、上部に酒志 備前屋、吉野屋、日向屋、裏  
面に、石工 英七と銘あり、左側の台石の正面には同じく弘化

三年十二月 奉寄進とあり、左面より大野原村 熊之助 柵太

奈太 桂治、利吉世話主 新〇〇仁瀬本村 乙大衛門、十蔵 伴

作、敬八、政蔵(後面に) 利三治、子之助山口栄寿、後藤八衛、

世話主 今朝松、和作